

2173再構築 22

9 イェソド : 基盤

エリー

9 イエソド:基盤

<調べた言葉>

きばん〔基盤〕

「集団の一員として働くこと」と「独立した個人としてふるまうこと」は、同時にはできない。どちらか選ぶことになる。

日本人なら、全員、日本を支配しているルール、法律に縛られる。

生まれた時から無条件に国民として受け入れられるかわりに、手続きを経て変更するまでは影響を受ける。

よい影響もあれば、悪い影響もある。

衣食住が満たされて、インフラもあって、トイレやゴミの処理もしてくれて、快適に暮らせる状況が整っているなら、それは一人ではできないことだから、よい影響と言える。

安定した生活基盤があって、働くことで活動に参加しているなら、国と個人の間により関係が築けている。

働く意志があって、能力もあって、実際に働くことで、「生産活動」に参加している場合、「集団の一員」として「有用である」と言える。

では、働く体力がないとか、能力に欠けるとか、意志がないとか、有用とは言えない場合どうするのか？

集団の中で、有用な一人として、同じく有用な人とつきあい、よい関係を築きたいと思うのが、多くの人の願いではないだろうか。

弱い人や困った人を、お金を出すことで間接的に助けることに協力はできても、自分の生活圏内に入ってくることは拒む。

ゴタゴタを持ち込まれたら、心安らかに、安心して暮らせないから。

それは、個人の立場では否定されるものではないが、全体を統括する立場に立ったら、有用でない人々とも向き合わなければならない。

犯罪の被害に遭うことなく、一生を平穩に暮らせたらいいと願うことは、自然な感情だと思う。

悪いものを遠ざけ、よいものを選ぶ。

しかし、全体を統括する立場に立ったなら、犯罪を防ぐことや、起きたときの対処や、その後の対応などについて考えなくてはならない。

主権を持つ場合、全員が考えなくてはならないのか、選挙で選ばれた代表だけが考えればよいのか。

一般的には、自分で自分のことをして、その上で納税をしていたら、あとは選挙で選んだ代表に任せてよいと考えられている。

システムを理解し、よい悪いを判断するためには、知識や経験が問われる。

「どうすべきか？」と問われても、多くの人は「分からない」と答えるだろう。

自分にとって有益で心地よい状態にとどまり、無益で不快な部分を排除したくなるのは、誰でも同じだから、権力者が自分のために権力を行使し始めた時、止められるのは選挙ということになる。

すると必然的に、考えることが問われる。

そこには、矛盾が生まれる。

衣食住を満たして、インフラを整え、生活の基盤を作ることを、代表者を選んで任せている。

自分は、自分のことを優先して、法律に反しない限り、自由を与えられている。

殺す、盗む、などは駄目だが、好きなところに住んで、好きな仕事をする自由はある。

任せただから、結果に対する責任は政治家にある。

それが、一般の人の感じ方だろう。

しかし、民主主義というものは、政治に関心を持ち、監視し、判断し、選挙で答えを示す必要がある。

それが、歴史から学んだ教訓。

つまり、「選挙で代表者を選べる」という意味で、「結果に対する責任」を部分的に担っている。

失敗した時、選んだ人間が悪いのか、選ばれた代表者の実行責任なのか。

代表者の責任を追及される話は聞くけど、その人を選んだ人の責任を追及した話を聞いたことがない。

記名投票ではないから、誰が入れたのか分からない。

そもそも、一人にかかる、「一票の重み」は、全体にどう影響を与えるのか曖昧だ。

選びたくなくても、候補の中から、よりましたな選択をしなければならないときもある。

全面的に信頼して、この人の言う通りに動けば間違いないと信じられて、実際に成功している時は、「監視」が問われにくい。

つまり、有用で有益な権力者ならば、安心して任せて、自分はなにも考えずにいられる。

しかし、苦しい状況にあるときや、汚職が蔓延している時には、「監視機能」が問われる。

もし、主権者である国民も、権力者である代表者も、自分で自分のことができない弱い人たちや、悪い人たちと、向き合うことを避けて、自分が心地よいことだけ考えるようになったなら、実在する弱者や悪人はどうなるだろう？

弱者は死んでしまうかもしれない。

悪人は悪いことをして、被害者が出るかもしれない。

自己責任という言葉の裏には、自分のことは自分でという意味以上に、他人のことまでやらなくてもいいとか、弱者を助け、悪人と対峙するなど、世間的な活動をしないでよいというニュアンスが隠れている。

一般人はそれでよいかもしれない。しかし、全体を統括する責任者がその態度をとったら、秩序が保てない。

清濁併せ呑む、度量の大きい人物が、優れた部分だけでなく、弱さや悪と向き合うことが求められる。

そして、そんな人はなかなかいない。

保護区は、許容範囲を決めて、条件を満たした人だけで作られる共同体。

自分のことが自分でできない弱い人はいない。

盗みや暴力に訴える人もいない。

そういう人は、寮生活ではじかれて、卒寮資格が与えられないので、保護区に入れない。

保護区に入った後、変わってしまった場合は、弱者は管理区でグループ生活を送りながら保護

され、犯罪者は罪を償った後で、自由区に追放される。

保護区では、自分のことだけでなく、共同体を中心とした、国全体のことを考えることが求められる。

好きなことだけしていればいいわけではない。

民主主義の歴史的教訓を生かす、「相互監視機能」を持たせる。

よく言えば、互いに見守る。

自由区は、代表者が、街の運営をする。

まかせたら、あとは自由に好きなことをしていい。

保護区は、「労働力を提供する」という参加の仕方をするので、実行者として意見を言える仕組みがある。

ボナ先生のような相談役がいて、一人一人の話に耳を傾ける。そして、そこでまとめた意見を持って、区長が全体の集まりに行く。

自由区では、自分の意見を通すために、お金を出さなければならない。

もし、誰も払わなかったり、必要額に足りない場合、均等割りして、全員の口座から強制的に引き落としされるため、「保護区を支援するお金を払っています」はセールスポイントになる。そういう会社で買い物をした方がいいという判断をしてもらえるかもしれないから。

そして、払ったことで発言権を持てたなら、誰に投資して、その人がどんなことをしたのかも、宣伝材料になる。

商売をしている人は、政治家とつながりがあった方がよいので、投資することに意味がある。それは、具体的なつながりなので、浮動票というものはなくなる。

自由区に住んで、企業が保護区を維持するためのお金を払ってくれたなら、企業に勤める個人は保護区を維持するためのお金を払わなくてもよい。

しかし、自分が住んでいる自由区のインフラ利用料は徴収される。代表者のやりかた次第だが、ただというわけにはいかないだろう。

どんな風に、いくらくらいとられるかは、街によって違うが、持ち家でも、借家でも、家に住んでいることが条件になるだろう。

あるいは、電子口座を持っていること。

自分でも、答えがでなくて、グルグルまわっているが、「信じて任せて好きなことをする」と「監視して判断する」という態度は、同時にはできない。どちらかになる。あるいは、やったり、やらなかったりする。

「自分のことに集中して、世間から距離をとっている時間」と「世間のことに関心を持ち、話題に参加する時間」は、同時にはできない。

しかし、切り替えることはできる。

保護区では、「世間のことに関心を持ち、話題に参加する時間」が自分の時間より優先される。集まりには参加しないといけないし、他人には関心を持たないといけない。

自由区では、「自分のことに集中して、世間から距離をとっている時間」が自由に持てる。好きなことだけ何か月も、何年もして構わない。

保護区は、実行者の一人として意見をいい、結果に対する監視を行う世界。

自由区は、住む場所や代表者を選ぶだけで、街の運営の実行には関わらない。

小説の基盤としては、情が中心になると思う。

普通ですらない、事務限定という条件付きの主人公ララは、「耐えてなんとかする」というサクセスストーリーを生きられない。

何とかしようと思うたび、体がネックになって、足止めされる。

それでも無理とあきらめないうで、「もしかしたらできるかもしれない」と挑戦していくが、それは普通の人なら普通にできることなので、共感は得られないだろう。

無意味に思えることに挑戦して、刹那的な生き方をしている。

16～26歳の間、自由区で一人暮らしをしている時には、稼いだお金を口口を追いかけて旅行することに使ってしまった、保護区を支えるためのお金を払ってない。

ララは、フリーランスというか、個人事業主だから、払うことが期待される。しかし、自分のことだけしていて、世間に関心を持っていない。

そうやって、自分のことしか考えていなかったララが、口口のインタビューをきっかけに、国の一員として何ができるか考えるようになる。

そして、一度はくつがえした、ボナ先生の後継ぎになることを再び決意する。

自由区で、自分の好きなものに囲まれて、楽しいことだけしていたララが、他人の弱さや、悪

と向き合っていく。

相談役として、本音に向き合い、それでいて流されず、正しい道を示せる強い人物として、村のために尽くす。

相談役は、村の内部を、区長は保護区を中心とした国全体を見守る存在。

二人で話し合っ、交換した情報を、相談役は村人に、区長は会議に還元する。

「好きなことだけしてのびのびとすごしたい」と誰もが思う。

しかし、そういう人ばかりでは、必要なことが満たされない。

血で選ぼうと、選挙で決めようと、誰かが弱さや悪に向き合わなければならない。

保護区では、区長や相談役になりたくてなる人もいれば、みんなに頼まれてなる人もいるだろう。

やりたくても信頼されない人もでるだろう。

自由区では、保護区を支援するお金を集めた人が発言権を持てる。

支援者に有利になる行動をしないで、公平に行動することが求められるが、どちらでもいいことなら、自分に都合のよい方を選ぶものなんだから、堂々と公表したらいいんじゃないかと思う。

陰でこそこそやるから問題になるなら、自ら宣伝するくらいの勢いでやったらいいんじゃないかと思う。

「特定の個人を有利にする行動をとらない」は納得できるけど、「公共性のあること」なら「その人」も「他の人」も含まれるのだから、「含めない行動」をとることは不可能ではないか。

指導者として生きることと、指導者の下で手足として働くことは、全く違うという。

手足として優秀であっても、指導者になれるとは限らない。

手足として無能でも、指導者として優秀かもしれない。

生まれ持った資質と、その後の努力で変わるから、やってみなければ分からない部分が多い。

しかし、指導者として生きるとは、厳しいことだ。流されて、おざなりになれば、全てが滞る。

「好きなことだけすればいい、夢中になれることを見つけろ、嫌いなことはするな」は、社会的に責任のない立場で、自分で自分の面倒を見ればよい場合に限られるだろう。

指導者になれば、好きなことだけしているわけにはいかない。

誰もが考えたくない、困難な問題が、最終的に持ち込まれるのが、指導者のところなんだから、難しい判断の連続になる。

官僚が考えたプランにハンコ押すだけなら誰でもできるが、その状態を繰り返していたら、確実に衰退するだろう。

つまり、自分から問題を嗅ぎつけて、解決していく情熱がなければ、指導者にはなれないのだと思う。

保護区は、直接民主主義を原則としているため、実行者として部分的に役割を担っている。指導者に限らず、他人のことを考えることが求められる。全体の意志に強い影響を受ける。

自由区は、間接民主主義を原則としているため、代表者に選ばれなければ、実行者としての責任がない。好きなことだけしていてよい。許容された範囲なら、自分で自分の行動の責任をとれるから、成功も自分のものだが、失敗も自分のものとなる。

保護区は、自由区からの支援を受けて、金儲けにならない部分を引き受けているので、クビというものはない。

しかし、村単位で、独立会計なので、村によって貧富の差は出る。

ある程度は、サポートするが、基幹産業や子どもの養育などで成功すれば、村の設備が充実する。

自由区は、自分の労働から、自由区の施設を利用する料金を払ったり、保護区を支援する寄付をしたりする世界。

自由をお金で買った世界なので、払うばかりで、支援されることがない。

ボランティアなど、自発的な支援はあるかもしれないが、公的支援はない。

なぜなら、自由を許すということは、自分の行動に責任を持つということだから、無茶な選択をして失敗した責任は、本人にあるからだ。

しかし、リスクをおかさなければ、成功もないので、継続しようとするだけで常に危険が伴う。

安全基準とかはもうけられているが、何に、どうかけるかは、経営者が決めることができる。だから、失敗の責任は経営者にある。

決めることができない、なら、「するな」と命じた側に責任があるが、決めることができる、なら、「する」と言った側に責任がある。

保護区は、決めることができない。システムの強い支配を受けている。

自由区は、決めることができる。システムの支配が弱い。

保護区には、「国土保護」という目的がある。その目的を達成するために、みんなで協力して

、みんなで働く世界。

そして、子どもたちに技術を継承させるために、彼らが作ったものを使う、という役割がある。

自由に決められる範囲が狭い世界。

自由区には、目的がない。自分で目的を定めて、自分の采配ですすめていってよい自由な世界。

全部自分でやることもできるし、人を雇って会社を作ることもできる。

好きなことを突き抜けて究め、結果的に他人の役に立つことはある。

そういう自由がなければ、社会は停滞する。

しかし、どうしていいかわからない人を守る、生活の基盤がなければ、貧富の差が開くばかりで、国は衰退すると思う。

リアルなわたしは、完全に遊び人人生だ。

好きなことをコツコツ続けてはいるが、それが社会的に役立っているわけではない。

自己満足のためにやっているようなもの。

好きで、楽しいから、趣味として続けている。

仕事は占い師を目指しているが、どうなるかはわからない。しかし、もう外に出て働くという選択肢は残されていないので、自活の道を進むしかない。

他人の要求に左右される、内職や在宅勤務も厳しい。

自由競争が膨大な無駄と失敗の上に、一握りの成功者を出すものなら、好きを仕事にすることは博打。

好きなこともなく、得意なこともない、普通の人々が、働けば必ず食べられるセーフティネットが用意されているからこそ、挑戦できるのではないだろうか。

やってみなければ、成功するかどうか分からない。

失敗しても、あきらめずに続けたから、成功したのなら、どこまで求め続けるかを決めるのは本人であり、他人ではない。

しかし、国土を保護し、子どもを育て、自立した老人の世話をする、という義務を果たすことを求めるセーフティネットには、「健康で、働ける」という条件が必要。だから、40歳までとする。

ある程度、労働力を提供する期間がなければ成り立たないから、動けなくなってから入ることはできない。

13～15歳の間の寮生活についていけなくて弱者烙印を押された人と、40歳までに保護区に入って途中で体が弱った人しか、「弱者」として保護されない。

好きなことをして、失敗して、のたれ死んでも、死体を焼いて、灰を土に戻してくれる。放置するのは衛生上問題なので、きちんと処分するが、供養はしない。

介護も、看護も、供養もなく、太く短く、好きに生きることは、それはそれでよいと思う。好きなことで満たされた時間を生きたのだから、成功しなくても、不幸ではないと思う。

でも、好きなことがなくて、必要なことも分からなくて、起業する力もなく、どうしていいのか分からない普通の人、不幸だと思う。

好きという気持ちは、自然に湧き上がってくるもので、ある人はあるし、ない人はない。好きという気持ちを持たず、義務と必要に終わられて動く状況は、幸せとは言い難いだろう。たまの気晴らしが楽しみで、楽しませてくれるものを求める。

仕事はお金のためと割り切る。

そういう「普通の人」は多い。

それでも、才能に恵まれて、食べていけたらいい。

才能にも恵まれず、生きる手段がなかったら、それはとても不幸だ。

やりたいことがあって、それは無謀な賭けだけど、成功すると信じて、みんなで応援して、それなりの居場所を確保する。

そんなハッピーな展開ばかりなら苦労しない。

挑戦が失敗に終わって、行き詰ってしまうかもしれない。

そもそもやりたいことなんてなくて、すべて無理に思えて動けないかもしれない。

そんな暗い部分をどうサポートするか考えることは、システムを構築する上で欠かせない。

いろんな理想世界の本を読んできたが、どれも強く賢い人を前提としていて、どんくさい人、やる気のない人をどうするかは出てこない。

主張に反対する人も、同じくらい優秀だったりして、エリート部分の扱いで争うことはあっても、「ちょっとだめな普通の人」が話題になることはない。

わたしは、どんくさくて、失敗ばかりけども、好きという気持ちだけは途切れたことがない。

誰でもそうだと思っていた。だから、好きなことばかりしてないで、食べるために稼がなければと思っていた。

みんなだって我慢しているのだから、わたしも我慢しなければと思った。

結婚して夫に「したいことは特にない」と言われるまで、樂園を求めたい自分の方が変わっていることに気がつかなかった。

だれでも望むと思っていた。

「一度は普通だが、何度も思うのは異常」と言われて、納得した。

稼がなくてはと思いつつ、経済的に自立できなくて、好きなこともやめられなくて、いっばいっばいだった。

結局、体を壊して、稼ぐことはできない、という状況になるまで、「好きなことをする」を自分で自分に許すことはできなかった。

普通に、会社員とか、お母さんとか、誰もが認める役割が欲しかった。

しかし、そうは生きられないとはっきりした時、結局、自分を救ってくれたのは追いかけてきた夢だった。

好きなことがあるから、体の問題があっても、前を向ける。

そう心が決まるまで、わたしみたいに駄目な人が求めるべきではないと思ったり、誰も考えてくれなかったらどうしようと思ったり、グルグル、グルグル、迷走していた。

その間、わたしは、自分のことしか考えてなかった。

わたしが答えを得ることができるかどうかしか、問題ではなかった。

樂園という、他人を巻き込む問題を考えているにもかかわらず、他人がそれをどう思うか考えなかった。

どうして？

なぜ？

答えを求めて、質問を繰り返すばかりで、自分の考えはなかなかでてこなかった。

占いの勉強をするうちに、少しずつ価値観が定まっていった。

言う側になると、言い争うことになる。

意見を求めて、うんうん、と聞いていたころとは違う。

それはとても怖くて、勇気がいること。

すみっこの目立たないところで、こっそり、聞いてくれる人に言う程度の勇気しかない。

誰も聞いてくれないのは寂しいが、カウントがゼロでなければ満足する。

やっとスタートには立ったけれど、一步踏み出したところで止まっている感じ。

右足分だけ前に出たけど、左足はまだスタートラインを越えていない。

両足越えられたら、どんな感じなんだろう？

スタートラインから遠く離れたら、どんな感じなんだろう？

まだまだ物語として、ふり幅が狭くて、イメージが広がらないよね。

頑張ります。